

## 日本バレーボール学会<sup>1)</sup>の設立とその発展

遠藤 俊郎<sup>2)</sup>

日本バレーボール学会の発足は、「日進月歩で変化しつつある現代社会において、バレーボールに関する理論・研究にも少なからぬ変化・多様化が認められ、これまでのような個人レベルでの研究活動だけでは限界があるのではないか、それならば先人の気概に学びつつも、これまでの研究の体系化の努力、相互の情報交換の場の設定、等を通じて新たなバレーボール学の構築を目指すべきであろう」という発想が発端である。そしてこの発想は今日まで学会案内や本学会が発信する様々な文章の中に常に参照されており、本学会の理念となっている。

この理念を実現すべく当初、朽堀申二氏（現特別顧問）、矢島忠明氏（現名誉会長）、そして遠藤俊郎（現会長）の3名が世話人となり、「バレーボール研究会（The Japanese Society of Volleyball Research：英語表記は現在も変わっていない）」としてその設立準備会を早稲田大学体育局（当時）において開催したのが1995年8月4日（金）であった。設立発起人として名を連ねたのは当時我が国でバレーボールの研究や実践において指導的立場で活躍されていた①明石正和（城西大学）②上田 実（法政大学）③遠藤俊郎（山梨大学：世話人）④亀ヶ谷純一（明治学院大学）⑤川合武司（順天堂大学）⑥河合 学（静岡大学）⑦柏森康雄（大阪体育大学）⑧清川勝行（天理大学）⑨島津大宣（日本女子大学）⑩高橋和之（日本女子体育大学）⑪朽堀申二（筑波大学：世話人代表）⑫豊田 博（千葉大学）⑬成田明彦（東海大学）⑭原田 智（立正大学）⑮福原祐三（筑波大学）⑯都沢凡夫（筑波大学）⑰宮沢栄作（駒澤大学）⑱矢島忠明（早稲田大学：世話人）⑲山本章雄（大阪府立女子大学）⑳吉田敏明（東京学芸大学）㉑森田昭子（東京女子体育大学）㉒廣 紀江（学習院大学）（敬称略、勤務先は当時）の22名の方々であり、第1回準備会にはその内10名の出席を得ることができた。その準備会の席上で研究会の活動内容や組織に関する規約案等が検討され、研究

会の第1歩がまず踏み出されたのである。その後2回の準備会を経て、1996年5月25日（土）に記念すべき第1回総会・研究会が早稲田大学において121名の大会参加者を迎えて開催され、正式にバレーボール研究会が産声をあげた。今でこそ学会等の細分化が進み、数多くの研究分野別の学会が乱立といっているほどの活況を呈しているが、この時期単一種目単位での学会・研究会組織は2～3学会を数えるのみであり、その意味ではバレーボール研究会は学問的時代の流れを予見し、それに先行していたといえるかもしれない。

その後、1999年には組織的にも整ったので名称を「バレーボール学会」へと発展的に改め、さらに、設立15周年を迎える2009年度より、いよいよ国際的な活動をも視野に入れて、「日本バレーボール学会」と改名した。

学会の経常的な活動としては、2010年度までに機関誌「バレーボール研究」12巻発刊、ニュースレター17号発行、2010年度で第16回目を迎える年1回の総会・研究大会の開催、毎年1～2回の研究集会、等積極的に活動を継続している。また、いち早く学会ホームページ（<http://www.jsvr.org/>）を開設し、インターネット時代にも対応してきた。さらに、当初100人強であった会員数も年々漸増傾向にあり、現在では小・中・高・大の学校関係者、実業団関係者、クラブチーム等の一般バレーボーラー、企業関係者、医療関係者等の様々な領域からの会員がおおよそ500名までになった。会員それぞれの職域構成は図1に示した。やはり研究職・教育職関係者が大半を占めるが、今後はさらに広い領域の関係者にも参会頂けるような努力を進めることによって、バレーボールに関わるスポーツ医・科学を包括的に論求できる場としての学会の存在を確固たるものにしていきたいと考えている。

また、1999年度には50回記念大会を迎えた日本体育学会から指名を受け、その大会期間中に体育・スポーツ関連学会連合大会として共催シンポジウムを開

1) The Japanese Society of Volleyball Research：JSVR（<http://www.jsvr.org/>）

2) 日本バレーボール学会会長／大東文化大学

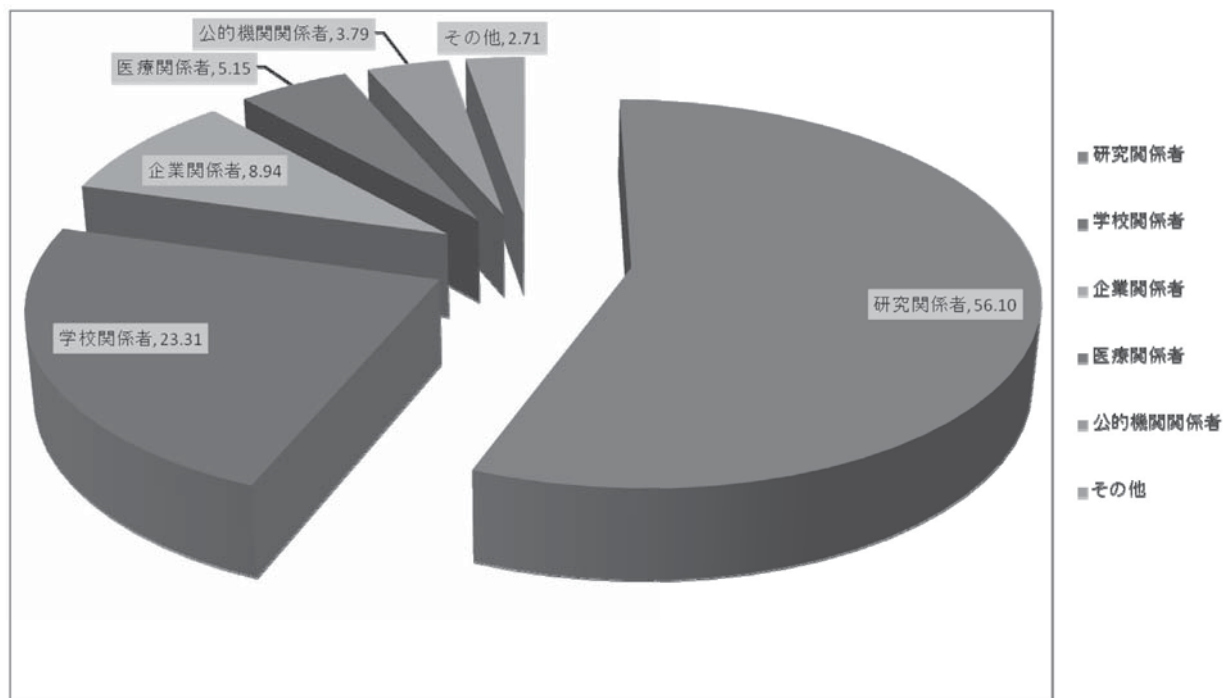


図1 会員の職域構成 (2010年5月現在(%))

催し、更に2007年9月20日には日本学術会議から協力学術研究団体の指定を受ける等、学術的団体としての認知度も向上してきた。

また、本学会創立10周年時には記念事業として「シンキングバレーボール 100Q入魂」(2005年5月15日、日本文化出版)が発刊されたが、15周年を迎えた2009年度においても、今日氾濫している様々なバレーボール用語の整理とその解説を目指した「バレーボール百科事典 バレーペディア」(2010年5月15日、日本文化出版)を出版しており、会員による研究知見の公開や今日氾濫しているバレーボール用語の整理と解説に取り組んでいる。また、次代を担う多くの子どもたちに親しくバレーボールに接してもらおうと「Enjoy Volleyball ～遊びで動きづくり～」(2010年8月、スポーツ指導者支援協会)という2枚組のDVDも制作している。学会として発達段階を考慮した子どもたちへの指導法を検討する中、子どもたちの興味関心を最大限に尊重しながら「見る」「判断する」「反応する」「コントロールする」といったバレーボールに発現する動作を、遊びを通して修得できるように工夫したものである。

このように、ゼロからのスタートを切った日本バレーボール学会であったがこの15～16年間で各役員、学会会員のご尽力の結果、学会としての基礎作りの期間は終了し、いよいよ拡充期に入る段階ということが

できる。

今後はさらに日本のバレーボール界に少しでも貢献できる知見を提供することはもちろんのこと、国際的にも、まずは台湾や韓国・中国といったアジアのバレーボール関係者との国際交流や学会の輪の国際化の試みを積極的に推進していくことを志向している。このことは国際的にもバレーボールに関わって学会としての組織形態を呈するのが唯一日本バレーボール学会のみであることを考えると、大変重要な使命とも考えている。

その第一歩として、2010年8月23日(月)～25日(水)には中華民国台湾花蓮市にある国立東華大学において、台湾バレーボール研究者と2010東アジアバレーボール科学会議(2010 East Asian Conference on Volleyball Sciences in Taiwan)をジョイントで開催した。日本バレーボール学会としても14名の研究者を派遣し、11題の発表を行った。会議の風景は写真1,2に示したが、若手を中心とした台湾バレーボール関係者の多くの参加を得ることができ、盛会裡に終始したことはJSVRの創立期からの構想の一つが現実化したものであり会議の規模はともかくとしてJSVRとしては大きなステップとなった。

また、国際バレーボール連盟(FIVB)では2011年1月13～15日の3日間に渡ってスロベニアのブレッドで2011FIVBメディカル会議の開催を計画している。



写真1 2010東アジアバレーボール科学会議の参加者と

FIVBとしてはこの種の会議の開催は今回が初めてであり、約50のテーマが設定されている。その中には障害とその予防法やドーピング関連に関するテーマはもちろんのこと、スロベニアでバレーボール選手に行われているメンタルトレーニングの利用、トップレベルのシニアとユース男子バレーボールの時間分析等も含まれており、バレーボールに関する医・科学の包括的会議であることが分かる。今後はこのような国際的な動きとも連動していくことができるようなバレーボールの医・科学に関する国際情報の収集と得られた情報に基づく時機を得た積極的な関与を推進していくことも必要と考えている。

さて、2010年度の日本体育学会体育方法専門分科会では、「実践系個別学会の活動と体育方法専門分科会の活動の関係性はどうか」というテーマの基にシンポジウムを企画し、体育方法専門分科会はもちろんのこと、実践系のそれぞれの学会全体が今後進むべき方向性について議論を深める中で、共通理解の獲得を目指した。本シンポジウムでは実践系学会として、本日本バレーボール学会を始めとして、陸上競技学会、水泳・水中運動学会、フットボール学会、テニス学会の5学会の代表者がシンポジストとして登壇し、それぞれの各学会活動の概要を披露すると共に体育方法専門分科会との関係性に関して私見を交わした。

この様な今回の日本体育学会体育方法専門分科会のシンポジウムを経緯して、日本バレーボール学会としては今後さらに日本のバレーボール界に貢献できる知見を提供することはもちろんのこと、専門種目学会として体育方法専門分科会と連携する中で、日本体育学会における本学会員による研究発表の促進やシンポジ

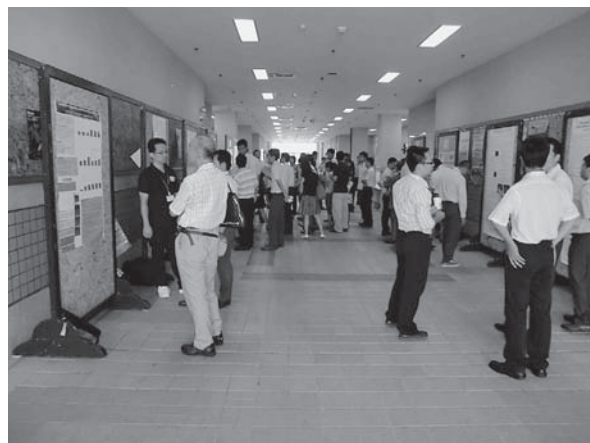


写真2 2010東アジアバレーボール科学会議ポスター発表風景

ウムへの話題提供や運営面での協働体制の構築を志向したいと考えている。その意味では本専門分科会には各実践系学会との関係性の強化を期待したい。

具体的には、近年日本体育学会体育方法専門分科会における「バレーボール」に関する研究発表の演題数に減少化傾向が見られ、個人的には憂慮すべきことと考えている。バレーボールに関わる研究者の怠慢を指摘することは容易ではあるが、分科会としてもより発表演題数の増加のために何らかの対処の必要性が求められるところであろう。研究者にとって研究発表の場が多く確保されることは好都合であることは間違いがない。そこで、専門分科会の会員と日本バレーボール学会の会員の重複率を鑑みて、本学会としても日本体育学会体育方法専門分科会である本学会員に対して積極的な研究発表の奨励をすることはもちろんのこと、数年に一度、日本体育学会時に分科会と共同開催という形で日本バレーボール学会大会を開催することも一考と思われる。このことは他の各実践系学会においても同様であり、このことによって専門分科会の関連学会として研究面での相互補完的な関係性の構築ができると考えている。

また、同様に数年に一度、日本体育学会体育方法専門分科会におけるシンポジウムへの話題提供をそれぞれの各実践系学会が責任を持って担当することも日本体育学会体育方法専門分科会と各実践系学会との学会運営面での協働体制の構築につながると思われる。

さらに、今回は実践系学会として、陸上競技学会、水泳・水中運動学会、フットボール学会、テニス学会、日本バレーボール学会の5学会からのシンポジストによる話題提供であったが、各実践系学会としてもそれぞれ他の学会活動の一端を垣間見ることができ、

実際に共通した悩みや問題点、さらには学会活動のそれぞれの工夫に触れることによってお互いの学会が刺激を受けることができたと感じている。また、研究活動においても各実践系学会に共有できる研究知見もあるはずである。そこで、日本体育学会体育方法専門分科会には、今後も引き続いて今回のシンポジウムに類

した分科会による各実践系学会相互の知見提供と情報交換の場・機会を積極的に提供すると共に、さらにはそのような場において論じられた知見の総合化・統合化・一般化を推進するという重要な機能を中心的に果たすことを期待したい。